

和紙の布

高橋 実

小国は和紙の里である。平成十七年長岡市に合併後は、小国和紙は長岡の顔にもなった。市役所の入っているアオーレ長岡の市長室の椅子や壁紙が小国和紙でできていることは知られている。小国和紙生産組合の今井宏明・千尋夫妻は伝統ある小国和紙のホープとして期待されている。

さて和紙には紙そのものをラベルや灯りの覆いとして使う方法のほかに加工して紙布として使う方法もある。和紙は材料が楮の皮の繊維を使っていて、丈夫なことは布に引けを取らない。和紙の布には、三種類ある。

1、紙衣^{かみこ}

その一つが出来上がった紙にコンニャクを塗って強度を保つ紙衣（かみこ）といわれるものがある。千尋さんが結婚式のウェディングドレスにこの紙布を着たことで知られている。お水取りで知られる奈良東大寺の僧たちがこの紙布を着ていることで知られる。この紙布は洗濯が利かない。この紙布に柿渋を塗ったのが渋紙である。ビニールの敷物がなかったころ、和紙を張り合わせ、この紙に柿渋を塗った渋紙を畳が汚れないために畳の上の敷物に敷いた。筆者が入学した、昭和二十八年上小国中学校の玄関二階にはこの渋紙が敷かれていた。渋団扇や番傘・投網の糸にもこの渋が塗られていた。柿渋は板の間床の塗料としての用途のほかに、水を通さず、和紙の強度を強めるために使われた。

2、柿渋

我が家は昔屋号「渋屋」と呼ばれていた。この渋作りについて「私の家の渋作り」（高志路 204号 昭和40年1月）という文章をのせた。五十年も昔のことになる。このころ父が健在で、需要は少なかったが、まだ作っていた。話はそれるが、ここで柿渋づくりにふれたい。八月末まだ柿が熟すまえ、柿の木一本いくらで買い、柿を落とし、これを南京袋に詰めて、荷車の通る広い道まで背負い、家に運んだ、此の柿を臼の中で餅つきのように搗き、細かくして水の入った桶に入れる。一昼夜置くと、柿の渋が染み出てくる。これを枠のついた四角の容器に移し、圧力をかけると、下の簀の子状の隙間から渋水が絞り

出されてくる。箱の中に遺った柿屑は捨てる。柿渋は大きな桶で保存・醗酵させる。一年以上経った柿渋を量り売りしていた。柿渋は当時需要が多く、荷車に積み、峠を越えて鯖石方面（現柏崎市）まで売りに行った。峠を越えた鯖石では渋を作っている人がいなかったのか。栃尾では渋作りが盛んだったと聞いている。渋のついた衣服は染め物のように黒くなって、洗っても落ちない。渋の用途として、渋紙の他中風や火傷の薬として買いに来る人もあった。渋を扱うには、塩分と金属を避けることだった。

ネットでは、柿渋は、柿^{かきしぶ}の未熟な果実を粉碎、圧搾して得られた汁液を発酵・熟成させて得られる、赤褐色で半透明の液体。柿タンニンを多量に含み、平安時代より様々な用途に用いられて来た日本固有の材料であると載っている。高橋昭英氏によると、柿渋は現在も工場生産され、紙布の補強剤で大切な役割を果たしているという。

3、油紙^{あぶらかみ}

このほか油紙といわれるものがあつた。ネットでは、桐油紙^{とうゆ}ともいい、西の内紙、美濃紙など厚手の純日本紙に、まずカキ渋を塗って乾燥し、その上に桐油または荏油^{えのあぶら}を何回も塗って乾燥したじょうぶな防水紙。これを表にして裏に薄布^{とうゆかっぱ}を合わせた防水衣を桐油合羽と名づけて古くから外出着に用い、ただ厚紙のみのものは油単^{ゆたん}と呼ばれて荷物の雨覆いに用い、雨傘には必ず用いられた。また雨よけの障子に張って油障子と呼び、現に歌舞伎の舞台に見る《吉例寿曾我》対面場のしとみ障子、《鬼一法眼三略卷》菊畑の花壇の覆いなどがそれである。

とある。桐油合羽は筆者が子供のころ、雨合羽として着ていた大人を見ている。桐油合羽は黒くて、長かった。桐油は桐の実から取ったというのがどのようにして作られたのか知っている人がいなかった。

4、紙布^{しふ}

もう一種の紙布^{かみぬの しふ}が紙布と呼ばれるものである。これは和紙を細く割いて撚りをつけ、紙糸のようにして織ったものである。柏崎市門出の紙漉き小林康生さんはこの紙布の作務衣を身に着けていた。紙布は布と同じく洗濯ができる。

ネットでは紙布^{しふ}は、紙糸を材料として織り上げた布である。紙糸を縦糸、横糸の両方に使用した物を諸紙布^{もろしふ}と言い、縦糸に絹・綿・麻糸を使い、横糸に紙

糸を使用した物を絹紙布・綿紙布・麻紙布と言う。紙をそのまま使用した紙衣と異なって軽くて肌触りが良く、特に女性の夏の衣料用として使用された。紙布は江戸時代になってから生産され、『毛吹草』や『諸国万買物調方記』、『和漢三才図会』には、陸奥の白石（現在の宮城県白石市）で生産されていたと記されている。当初は奉書紙の反故紙で紙糸を作った。

当地の「高三織物」（長岡市小国町檜沢）高橋昭英・克明氏の話では、紙布は経糸が絹で、横糸が紙糸で、経糸・横糸ともに和紙を使うものを諸紙布と呼んで区別している。三月二十日 高三織物を訪ねて、話を聞いた。高三織物では諸紙布で織った着物と帯を見せていただいた。そこには次のような説明書きがあった。

もろしふ
諸紙布

紙布とは和紙を細く切り、撚りをかけ、横糸として織った布をいい、この諸紙布とは、縦糸横糸ともに紙糸を用い、一本一本ていねいに織った紙糸だけでできているものをいいます。この製品は紙の糸を柿渋で染色し、一年以上も「自然調合」させたもので、一枚一枚の和紙からできるこの織物はその製作工程に相当の年月を要し、大変希少な織物でございます。柿渋の自然な色あいを紙糸特有の肌合いを末永くお楽しみ下さい。えちごおぐに「くるまや」工房

和紙の産地であり、柿渋のある当地小国で昭英氏が織り始めたという。諸紙布は厚くて、幟旗などに使用されることが多いという。小林さんの話では、水戸の桜井貞子さんが途絶えていた諸紙布を復活したもので、桜井さんは教室を開き、門下生も多いと聞く。繊維の太さは六ミリ、三ミリ、一・五ミリとあるが一・五ミリはワイシャツなどにも使われる。普通は三ミリ幅が多いという。しかし、そこでも紙の厚さによって違いが出てくるようだ。

小林さんの着用の紙布は丈夫で何回も洗濯が利くという。

終わりに

和紙と布、そこに介在する柿渋、この三点が合わさって和紙の布ができあがっていることを知ることができた。和紙の里・柿渋作りの家に生まれながら知らないことが多くあったことを実感する。話を聞かせていただいた今井千尋さん。小林康生さん、高橋昭英。克明さんにお礼申し上げます。